

# はとの子だより

No. 4 令和7年7月18日(金)発行

学校教育目標 自律 のびのび きびきび わくわく

## 学びをつなぐ宿泊行事～5年自然体験学習・6年修学旅行～

あっという間の1学期でした。特に高学年の子どもたちにとっては、運動会やオープン研修会、宿泊行事、そして夏休み中に始まる一大プロジェクトに向け、息をつくひまのない毎日を送ったことと思います。

中でも、宿泊行事は、先に述べた学びを、一つひとつつなぐ取組だったように感じられました。



5年生は、岩城少年自然の家で身近な自然にたっぷりと触れ合いました。火起こしから取り組んだ飯盒炊飯ではお湯と火の加減に五感を研ぎ澄まし、こびりついた焦げ跡の洗浄に苦労しました。家では全て機械がしてくれる作業を、自らの身体を使って行うことにどんな意味があるのだろうと疑問をもつ子どもたちもいたはずですが、しかし、文明の進歩は、全てのこのような苦労や不便の感覚に端を発しています。「あんなこといいな、できたらいいな」の精神が、ルンバやスマホを生み出したのです。いにしえの人々から受け継

がれてきた創意工夫の精神とのつながりを、願わずにはいられません。

また、岩城少年自然の家でなければ体験できないのが、プロジェクトアドベンチャー(略称PA)です。様々な難易度に分かれたタスクを、仲間との協働を通して解決していく体験活動は、集団行動の難しさと大切さを実感できます。時には、「みんなが頑張りすぎることであまくいかない」事態も発生するのが、PAの面白さです。仲間との程よい距離感や自分の役割、立ち位置などについて見つめ直す機会になったはずですが。

最後のポイントラリーは思わぬかたちで中断することとなり、社会が抱える今日的な問題を痛感したはずですが、「クマったなあ」では済まされない自分事としての認識を新たにしたのはなかったでしょうか。まずはみんな無事でなによりでした。的確な判断と迅速な行動の重要性が改めて確認できた経験でした。



6年生は、6月下旬にどっぷりと函館の社会や文化に浸ってきました。今年度の目玉は、初日から函館を満喫できるようにした日程の工夫です。五稜郭は例年であれば2日目の自主研修活動の選択肢の一つでした。しかし、前回の「はとの子だより」でお伝えしたように、戊辰戦争における秋田と函館のつながりを事前に学んでいます。その後、八橋の全良寺に現存する「官修墓地」でのフィールドワークを通して、墓碑に刻まれた新政府軍の戦没者の出身地や年齢、戦没地などを読み取ることで、子どもたちといくつも違わない年齢で命を散らした彼らが生きていれば向かったであろう五稜郭へと思いを馳せました。そこで今回の修学旅行初日は、全員で五稜郭を訪れるという日程にしたのでした。



帰ってきた修学旅行隊の引率者の誰もが、「五稜郭のガイドさんが話すことに対する子どもたちの食いつき方が素晴らしかった」と口を揃えました。五稜郭を神のご加護にあずかるようにと建立された北海道東照宮も、今年度の6年部が新開拓した訪問地でした。初日の日程の大半が、事前に社会科で学んだことや、秋田の歴史とのつながりを実感できる内容となりました。

帰りは路面電車2両を借り切って移動し、函館の土地勘も養うことができました。2日目の自主研修活動につなぐこの取組も、今年度初めての試みでした。自主研修活動の内容もグループごとに多彩で、日本最古の観覧車が現存し稼働している遊園地では、日本最古であることを公式に認定してもらうために尽力した担当者からその苦労話を聞いてくることもできたそうです。「名探偵コナン」など、映画のロケ地になることも多い函館で、聖地巡礼と写真撮影ツアーを企画したグループもありました。旅先での学びをどのようにかたちにして残すのだろうという事後の活動成果も楽しみになる修学旅行でした。



前例踏襲に陥らず、子どもたちの学びに応じて「なぜ函館?」「函館で何を・誰に?」と考え、労を惜しまず準備した子どもたちが、この経験を遠い将来、どのように振り返るだろうかと考えずにはいられませんでした。

### ♪ 思い出写真館 ♪



負けた方が片付けね



皮むき選手権3連覇中



ほら、野菜も食べなさい



おやつでベトベトの手をお清め

## 障害理解から多様性理解へ～よつば学習、歌の虹コンサート～

特別支援学校の先生が、交流予定の2年生を対象にふたば学級の子どもたちの紹介をしてくださいました。これは、例年どおりの年度始めの授業の光景です。



しかし、いつもと異なったのは、そこに2年生の保護者の方々が何人もいらっしやったことです。2年部の働き掛けにより実現したこの試みを喜んでくださったのは、誰よりも特別支援学校の先生たちでした。

本校は、令和5年度からのよつば学習を、「障害理解学習から多様性理解学習へ」とシフトチェンジしています。かつては、障害の特性をよく知ることから始めて、共生社会の実現の基盤づくりを進めてきたのですが、理解が深まるにつれ、「障害の有無

にかかわらず人はみなそれぞれに得意なことや不得意なことがあります、好きなことや嫌いなことがあります、自分が大切にしていることが、他の人にとっても同じ意味で大事だとは限らないことがある」ということへの理解を深めていくことのほうが大切だと気付いてきました。このような意識を、子どもだけでなく保護者の方々と共有できる機会になりました。



わたしははなさんには  
ぬりかたを見ました。すごくきれいな  
とおもいました。ぬりかたがぐちゃぐちゃ  
だったのですが、いろとりどりで、うい  
ぬりかたもあるのがおもしろい



う、わたしはかきょうのみんなどおそべたのしりてです。  
ふいふいは、なかよくできるかな? とおそべたけれど、  
なかよくできました。それに、おそべたは  
かきょうのみんなどなかよくできるかな? と思  
ました。おそべたのしりてで、わたしのしりてがよくなる  
サプライズをつくってあげたいです。

2年生の交流後の振り返りカードを2点紹介します。多様であることが理由でいがみ合ったり張り合ったりするよりも、認め合い受け入れ合うことで、互いに気持ちよく暮らしていける社会が生まれます。そのことを、子どもたちが何よりもよく理解できていると感じられます。

左の子は、「ぬりかたがぐちゃぐちゃ」であることに初めは驚いていますが、「こういうぬりかたもあるのか」と捉え直しをすることができました。右の子は、「なかよくできるかな?となんだ」のですが、「なかよくなれるサプライズ」まで願うように変わりました。

こうした考え方が附属学校園の中で次々と広がっていくことが、共生社会の基盤づくりにおいて大切なことだと考えています。

合唱部は、コロナ禍が明けて以来、特別支援学校との交流を定期的に進めてきました。7月上旬にも「歌の虹コンサート」と称して、昼休みの時間を拡大した日程で、音楽室を会場にしたコンサートに、特別支援学校の子どもたちを招待しています。

初めはお互いに緊張気味でしたが、演奏が進むにつれ、楽しくなって踊り出す子が現れたあたりから笑顔の輪が広がりました。最後は自然と肩を組み合わせる姿も見られました。



目をつぶって聞き入る人もいれば、リズムに乗せて体を揺らす人、声をあげて喜びを表現する人など、歌の感じ方も人それぞれです。そのような姿を目の当たりにして、演奏した合唱部の子どもたちは歌の力や歌う喜びを実感することができています。

## 151年目のはとの子はいま



自然科学学習館で不思議体験！



附属幼稚園との交流学习「今度何して遊ぶ？」



オープン研修会でたくさんの人に見られて緊張…



総合環境センターでゴミ問題を考える

みなさん、よい夏休みをお送りください  
2学期にまた元気に会いましょう



スイーツ開発して市内の菓子店とコラボしたいです！